

# 死を招く「熱中症」を避け!!

体調確認!!

所長・職長等による

作業前  
作業中

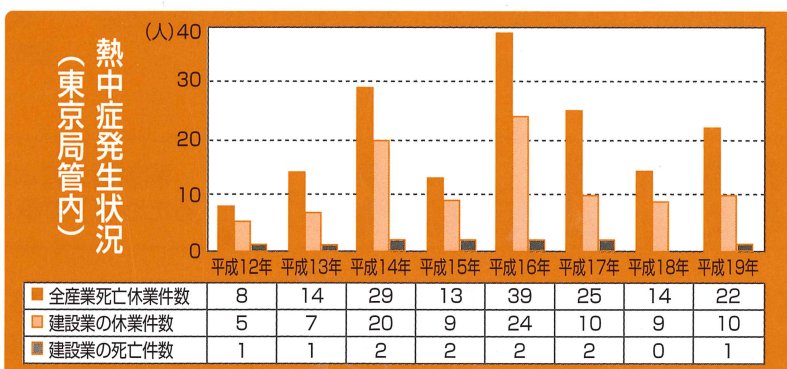


毎年、夏に集中して熱中症が発生しています。

昨年8月、東京労働局管内において、ビル屋上の防水工事中に熱中症による死亡者が出ました。又、昨年、勤務中に熱中症にかかり医療機関で治療を受けた人は、545人です。中でも建設現場等、屋外で働く方が多くを占めています。

熱中症に対しては、正しい知識と適切な予防対策や応急措置が必要です。

熱中症の予防対策を徹底しましょう!!



## 平成19年に発生した熱中症の発生事例

| 発生日時間           | 業種               | 発生状況  | 作業の内容                   | 発生時気温(最高気温)      | 被災程度                  |
|-----------------|------------------|---|-------------------------|------------------|-----------------------|
| 8月4日<br>14時10分  | その他の<br>建設工事業    | 既存ビルでシート防水端末のシーリングの施工中、休憩のため座り込んだ後、眼の焦点が定まらず、心肺停止状態になり、病院に搬送されたものの、死亡した。  | ビル屋上                    | 35.5℃<br>(36.0℃) | 死亡                    |
| 8月16日<br>13時30分 | その他の<br>廃棄物処理業   | 地下タンクの清掃・検査作業を猛暑の中で実施していたところ、気分が悪くなり、帰宅した後嘔吐をしたので救急車を呼び病院に搬送され、熱中症と診断された。   | 防水工事<br>タンクの清掃・<br>検査作業 | 37.1℃<br>(37.7℃) | 休業10日                 |
| 8月16日<br>13時30分 | 一般飲食店            | 仕事が終了し、更衣室で着替えた後、気分が悪くなり椅子に横になり体を休めていたが良くならないので、救急車で病院に搬送し熱中症と診断された。  | そば屋<br>厨房内作業            | 34.3℃<br>(34.3℃) | 休業7日                  |
| 8月17日<br>14時30分 | S・RC造家屋<br>建築工事業 | 1階外構部の左官作業準備中、1階エントランス付近に道具を取りに行く途中で倒れ、熱中症と診断された。   | 外構部の<br>左官準備作業          | 34.5℃<br>(34.5℃) | 休業14日                 |
| 8月17日<br>15時10分 | S・RC造家屋<br>建築工事業 | 午後から詰所内部にあった鉄筋結束線の箱(20キロ)を外部コンテナに移動する作業を行っていたところ、14時30分頃になって気分が優れず、冷房の効いた詰所で休んでいたが、さらに具合が悪くなり救急車で病院に搬送し熱中症と診断された。 | 鉄筋結束線の<br>移動作業          | 36.3℃<br>(36.4℃) | 脱水症状後の<br>脳梗塞<br>休業6月 |
| 8月17日<br>17時00分 | 警備業              | マンション建設現場で交通誘導の警備業務を行っていたところ、昼過ぎになって手が震えだし、痺れて痙攣を起したため病院に行き、熱中症と診断された。  | 建設現場の<br>交通誘導<br>警備作業   | 32.9℃<br>(36.4℃) | 休業1月                  |
| 8月21日<br>17時00分 | S・RC造家屋<br>建築工事業 | 生コン圧送作業を行い、午前10時の休憩中に気分が悪くなり、筋肉がこわばって顔が青ざめたため病院に搬送し、熱中症と診断された。  | 生コン<br>圧送作業             | 33.1℃<br>(36.2℃) | 休業7日                  |
| 8月21日<br>18時00分 | S・RC造家屋<br>建築工事業 | 高層マンションの屋上で現場施工管理業務終了後、めまい、吐き気がして顔色も悪くなったので、病院に行ったところ熱中症と診断された。   | 建築施工管理                  | 31.9℃<br>(33.6℃) | 休業17日                 |

気温は発生場所近辺の気象庁観測データです。

# 熱中症とは

熱中症とは、高温の環境下で体温調節や循環機能などの働きに障害が起こる病気で、症状などにより次のように分類されます。

## 熱射病

熱中症の中では致命率が高く、緊急の治療を要する。突然意識障害に陥ることが多い。発病前にめまい、悪心、頭痛、耳なり、いらいらなどがみられ、嘔吐や下痢を伴う場合もある。体温調節機能の失調、体温又は脳温の上昇を伴う中枢神経障害が原因と考えられている。

## 熱けいれん

四肢や腹部の筋肉の痛みを伴い、発作的にけいれんを起こす。作業終了時の入浴中や睡眠中に起こる場合もある。大量の発汗による塩分喪失に対し、塩分を補給しなかったことにより起こる。

## 熱虚脱

全身倦怠、脱力感、めまいがみられる。意識混濁し、倒れることもある。高温暴露が継続し、心拍増加が一定限度を超えた場合に起こる。

## 熱疲労

初期には、激しい口渇、尿量の減少がみられる。めまい、四肢の感覚異常、歩行困難がみられ、失神することもある。大量の発汗で血液が濃縮することによる心臓の負担増加や血液分布の異常により起こる。



# 熱中症を防ぐには

直射日光により高温環境となる屋外作業所などでは、熱中症を予防するため以下の事項を守ってください。

## (1) 作業環境の面から

- 日除けや通風をよくするための設備を設置し、作業中は適宜散水する。
- 水分、塩分の補給のためのスポーツドリンクなどや身体を適度に冷やすことのできる氷、冷たいおしぼりなどの物品などを備え付ける。
- 日陰などの涼しい場所に休憩場所を確保する。
- 作業中の暑熱環境の変化がわかるよう、熱中症指標計等によりWBGT測定を行う。

暑熱環境のリスクを評価する場合には、気温に加え、湿度、風速、輻射熱を考慮して総合的に行う必要があり、「WBGT」は、基本的温熱諸要素を総合している有効な手段と考えられています。その活用については、平成17年7月29日付け基安発第0729001号通達「熱中症の予防対策におけるWBGTの活用について」により示されています。

## (2) 作業の面から

- 十分な休憩時間や作業休止時間を確保する。
- 作業服は吸湿性、通気性の良いもの、帽子は通気性の良いものを着用する。

## (3) 健康の面から

- 健康診断結果などにより作業者の健康状態をあらかじめ把握しておく。
- 作業開始前はもちろん、作業中も巡視などにより作業者の健康状態を確認する。



# 救急措置

作業開始前にあらかじめ緊急連絡網を作成し、関係者に知らせておいてください。また、作業現場の近くの病院や診療所の場所を確認してください。

熱中症は、早期の措置が大切です。少しでも異常が見られたら管理・監督者に直ぐ知らせると同時に下記の手当てを行い、直ちに病院に連れて行き、医師の手当てを受けてください。

## 手当ての方法

- ◆ 涼しいところで安静にする。(安静中は、1人にさせない。)
- ◆ 水やスポーツドリンクなどをとらせる。
- ◆ 体温の高いときは、衣服をゆるめて首やわきの下を冷やす。



以上のことで、不明なことがありましたら、東京労働局労働衛生課・各労働基準監督署までお問い合わせください。